植民地帰りのおじたち
—『クランフォード』におけるおじの考察—

林　美佐

1. はじめに

十九世紀の少年向けの雑誌『ボーイズ・オウン・ペーパー』に連載されたI・フィリー・メイヨー（I. Fyrie Mayo）の小説『ダンおじさんが一財産つくった場所（Where Uncle Dan made his fortune)』(1880）では、南米でスペイン人たちの中に混じって財産を築き上げた裕福なおじ「ダンおじさん」(Uncle Dan）が登場する。彼は親戚の中で唯一の金持ちであり、その恩恵に語り手の甥たちがあずかっている描写がある。

> Uncle Dan brings over plenty of money, and generally stands treat wherever he goes, and whatever he does. And I am sorry to say it is not those of his relations who do him most credit during his absence, who are the most assiduous in their attentions to him when he appears. (Mayo 609)

甥や姪たちに気前の良い外国帰りの裕福なおじ、といった人物像は、1865年にアンドリュー・ハリデイ（Andrew Halliday）が、雑誌『オール・ザ・イヤー・ラウンド』に載せた「我らのおじ　(Our Uncles)」の内容にも繋がる。

> I appeal to the public. Is not this your idea of uncles? That they are all kind-hearted old fogies, whose whole mission on earth is to give their

nephews and nieces sovereigns, and make them happy; that they are short and fat and choleric, gruff externally, but within, warm; that, almost as a rule, they make a great deal of money in India...(Halliday 108)

ハリデイはこのエッセイで、一般的に思われている外国帰りのおじの肯定的なイメージと、実際のおじの姿がいかに異なるかを記している。裕福で気前の良いおじは理想像にすぎず、現実には常に威張って、己の財産をひけらかす偽善者としてのおじや、さらに周囲の人々には何も与えずに、求めようとするだけの厄介者でしかないおじしか存在しないという内容から、ダンおじさんのようなおじは想像上の産物でしかないと受け取ることができるというのである。

この理想の外国帰りのおじ、というイメージにほぼ近い人物が、ギャスケルの『クランフォード』(1853) に登場する。作品の中心人物である老嬢ミス・マティー (Matilda) の兄弟のピーター・ジェンキンズである。彼は若い頃に父親との争いがもとで家を飛び出し、海軍に入隊するが、その後行方不明になる。しかしクランフォードを訪れた奇術師の妻から、インドで暮らすピーターらしき人物の存在を知った語り手のメアリー・スミスの助力によって、彼は現地で築いた財産と共に故郷に戻り、破産したミス・マティーの生活を救い、街の人々も彼の富の恩恵を受ける。

しかし、このピーターには甥も姪もいない。二人の姉妹のうち、姉のデボラは父を支えるために独身を貫くことを誓い、そのまま生涯を終える。妹のミス・マティーも、姉に引きずられるような形で、当時結婚を望んでいた男性がいたにもかかわらず、結婚をあきらめる。ピーターは本来ならおじと呼ばれることはない人物である。しかし血縁上のおじではないにもかかわらず、彼はハリデイのエッセイで評される理想のおじの要素を備えていると思われる。彼はインドで藍の栽培によって財産を築く。外国で築いた財産が、結果的に身内に大きな影響を与える、とい

う展開は、同じ時代の他の作家の描くおじに当てはまる部分がある。そこで本論文では、ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』(1849-50) とコリンズの『月長石』(1868) に登場するそれぞれのおじを取り上げ、それぞれの姪に与えた影響を追いながら、ギャスケルの描くピーターのおじの性格を考察してきたい。

2　おじの定義

甥の場合、男子であるので、孤児になっても職業を選択する途は許されている。甥は自分で世間に出て働き、名を上げていく可能性がある。また、おじとの関係に不和が生じた場合、絶縁して出ていくことも可能だ。『デイヴィッド・コパフィールド』のダニエルの甥ハムも、仲たがいはしないものの、おじと暮らすことをやめて家を出る。しかし姪の場合、孤児になって不安定な立場に立たされた場合、女性としての立場から職業も限られてくるので、おじの力に頼る傾向が大きくなる。おじがいるかいないか、善人か悪人かで、彼女のその後の運命が決まってしまうのだ。

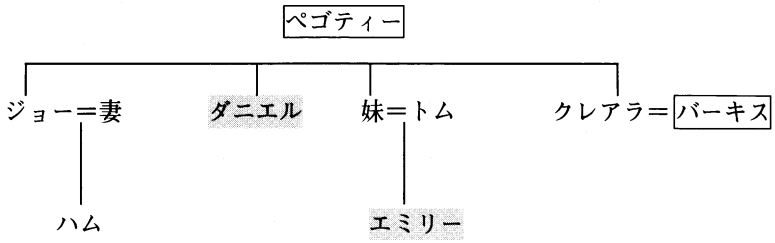
おばではおじよりもやや力不足の傾向がある。おばの場合、甥や姪に金銭的援助ができるほど裕福な立場にいなければ、そちらの面で支えることはできない。更に、彼らに援助できるか否かには、結婚の有無も関わってくる。一家を支える立場である以上、自分の家族にかかりきりになって、彼らをなおざりにしてしまう場合もあるからだ。主人公デイヴィッドの大伯母は、主人公に家と勉強できる環境を与えることができたが、甥に遺せるほどの財産は持たない。そのためデイヴィッドは自分の力で社会に出て身を立てることになる。

『デイヴィッド・コパフィールド』に登場するヤーマスの漁師のダニエル・ペゴティーは、孤児になった甥や姪、死んだ相棒の未亡人を養う善良な人間として描かれる。一方、『月長石』では、上流階級出身の軍人のジョン・ハーンカスルが、一族中からつまはじきにされ、独身のま

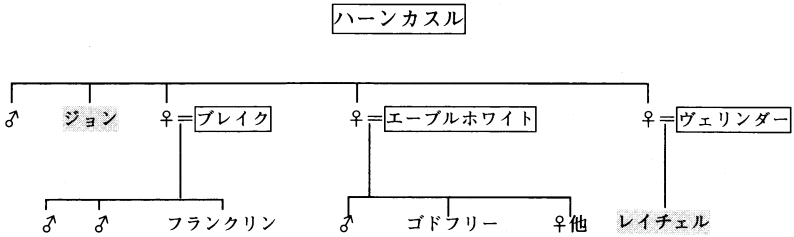
ま阿片中毒で亡くなり、姪に呪われたダイヤモンドである月長石を遺すことになる。階級も職業も性格も親族関係も異なるが、この二人のおじはそれぞれ姪に大きな影響を与える役割を担っている。

それぞれのおじの立ち位置を家系図にしてみると、どちらも独身であり、次男であると分かる。

『デイヴィッド・コパフィールド』



『月長石』



この二つの作品では、おじは、甥や姪に対して保護と遺産提供の二つの要素を持っていると考えられる。ハムやエミリーは両親を亡くし、おじから実の子供のように育てられる。特におじと姪の関係は親密だった。もっとも、当時の小説では、姪を苦しめるような役割の伯父も描かれることがある。例えば同じ作者が描いた『ニコラス・ニクルビー』(1838-39) のラルフ伯父は、姪のケイトが悪徳貴族に強引に誘惑される立場を

訴えて助けを求めても、己の私欲のために、訴えを聞き入れない。ダニエル・ペゴティーはその反対だ。美しく育った姪を溺愛し、彼女を玉の輿に乗せて楽をしようなどとはつゆにも思わず、自分の甥との婚約を心から祝福する。

孤児になった娘が伯父に引き取られるという設定は他の作家の小説でもよく見かけるが、保護者としての伯父は、だいたい経済事情に余裕がある中流階級が多い。しかしペゴティー家はそれほど裕福というわけでもなく、むしろ海辺の船を改造して暮らす貧しい漁師の家である。しかしデイヴィッドの視点からは、その家は実に居心地良く作られていて、ダニエルは行くあてのない未亡人や同じく孤児になった甥のハムも引き取り、妹の雇われ先の子供であるデイヴィッドまで暖かく迎え入れて楽しく過ごしている。そのために姪のエミリーは、そのような伯父に感謝し、楽をさせてあげたい思いから、淑女になりたいという上昇志向を持ってしまう。彼女の幼少の台詞は、まさにその望みを反映していた。

> ‘You would like to be a lady?’ I said.
>
> Emily looked at me, and laughed and nodded 'yes.’
>
> ‘I should like it very much. We would all be gentlefolks together, then. Me, uncle, and Ham, and Mrs Gummidge. We wouldn’t mind then, when there come stormy weather. – Not for our own sakes, I mean. We would for the poor fishermen’s, to be sure, and we'd help’em with money when they come to any hurt.’ (Dickens 47)

しかし生まれつき美人で、可愛がられて育ったエミリーは、その望みに執着したまま成長してしまう。それが原因で周囲から孤立してしまいがちになり、従兄との結婚も決まっていた矢先、上流階級の青年スティアフォースとの駆け落ちを決行してしまう。伯父のため、という思いから始まった願いが、逆に伯父を中心とした温かい家を崩壊させてしまう

皮肉な展開になってしまった。娘が過ちを犯した場合、実の父親なら一家の面汚しとみなして縁を切る者もいただろう。「堕ちた女」でよくあるパターンでは、母親が必死に行方を捜す一方で、父親はたとえ娘が帰ってきても家に入れないという構図がある。ギャスケルの短編『リジー・リー』(1850) でも、過ちを犯した娘を勘当した父親の死後になって、ようやく娘探しを始める母親の姿が描かれている。しかしダニエルは決して姪を責めず、スティアフォースを引き合わせたデイヴィッドすら責めなかった。

やがてエミリーがスティアフォースから捨てられ、行方不明になったと聞くと、ダニエルは捜索の旅を続ける。その時点でエミリーは「堕ちた女」になったのも同然だが、ダニエルはそれを一向に気にしない。ダニエル伯父は、一切を投げ出して姪を探す旅に出て、わずかでも可能性のある所はくまなく探し、フランスまで渡ってゆく。そしてエミリーがいつ帰ってきても良いように、家に明かりを灯し、服まで用意して待っていた。

ここまで姪に尽くす伯父は、当時の作品でもあまり見られない。姪に援助する伯父たちはいるが、あくまで自分たちの体面を傷つけない程度である。父親になら見捨てられて当然の状態の娘を保護できる役割に、ダニエル伯父が選ばれたのは、このような場合に助ける役割を担うべき母親や叔母といった女性の親族では力不足だからかもしれない。だからといってデイヴィッドやハムでは結婚の可能性が出てしまう。そのために、父親代わりとして、社会的に姪と一緒にいても問題ないとされる伯父にその役割が与えられたと考えられる。そして姪を探し当てたダニエルは、「堕ちた女」同然になってしまった姪が暮らしやすいように、海外の植民地への移住を決意する。ダニエルは、一生をかけて姪の保護者であり続けたおじとして描かれたと解釈できる。

長男が財産を受け継ぐ制度を持っていた英国社会では、次男以下は自分の力で財産を築く必要がある。そのために、牧師や商人や軍人などの

職業に就き、海外の植民地に行く者も少なくはない。次男であるため、親の財産を継承できずに、親戚から遺産を譲られて軍人になった、『月長石』のジョン・ハーンカスルもその一人だ。彼はインドの戦闘に参加し、略奪に近い形で月長石を手に入れた。この小説における人物関係にも目を向けてみよう。

財産を築いたおじが独身である場合、遺産は甥や姪のものになる。ジョンは死後、月長石を名指しで姪のレイチェルに遺した。しかし、ジョンの遺した月長石は負の遺産ともいえる代物だった。この宝石の盗難事件によって、彼女は愛していた従兄フランクリンに疑念を抱き、絶交してしまう。唯一の肉親だった母は病気で亡くなり、レイチェルは孤児になってしまった。従兄のゴドフリーとの婚約を破棄したことで、後見人になったエーブルホワイト伯父からも見放されてしまう。彼女の周囲に対する頑なな態度は、昔から仕えていた執事ベタレッジを困惑させ、人々からひんしゅくを買ってしまう。ともすれば名を貶めかねない行動にレイチェルが出てしまったのも、この月長石が元凶なのである。

レイチェルは月長石という厄介な遺産を渡したジョン伯父にまともに会ったことはなく、作中では一度も顔を合わせない。レイチェルの誕生日にジョン伯父が来ても、母親と執事によって追い返されてしまったので、果たして彼女が伯父にどのような感情を抱いていたのかは知る由もない。母親が嫌っている様子から、決して良い先入観は持ってはいなかっただろうとは思われるが。ジョン伯父は、ハリデイの前述のエッセイをふまえると、いわば一族から排除すべき嫌われ者に当てはまる。その遺産が問題を引き起こす展開からみても、遺産提供というおじの要素が、作品に与える影響の大きさに関わっていると言えるだろう。

3　植民地の富

『デイヴィッド・コパフィールド』の冒頭は、デイヴィッドが羊膜をかぶって生まれて、それが水難よけのお守りとして売りに出されるくだ

りから始まる。それを買い取った老女は溺れることなく九十二歳まで生きた。その彼女の言動が次のくだりで描かれる。

> I have understood that it was, to the last, her proudest boast, that she never had been on the water in her life, except upon a bridge; and that over her tea (to which she was extremely partial) she, to the last, expressed her indignation at the impiety of mariners and others, who had the presumption to go 'meandering' about the world. (Dickens 14)

老女が飲んでいる好物の紅茶こそが、彼女が軽蔑する船乗りたちによって運ばれてきたものであるにかかわらず、その事実を認識しない姿が描かれる。この老女は、どのような過程を経て紅茶が自分の目の前に運ばれてきたかを知らない。

当時の英国社会の人々に紅茶を飲む習慣が広まったのは、1830年代に東インド会社で三角貿易が確立し、中国から紅茶を、インドから砂糖を輸入するようになった背景がある。この羊膜の逸話は、作品の展開にあまり関係がない部分に思われるが、このお守りが象徴する水難は、多くの登場人物の家族や本人の死因として、何度も登場するのだ。

『月長石』の冒頭では、1799年のインドのセリンガパタムの戦いが描かれる。この戦いは第4次マイソール戦争として、東インド会社のインド侵略の歴史に刻まれ、この後、東インド会社は南インド全域を支配下に置くことに成功する。そしてインドと中国を中継とした貿易から、『デイヴィッド・コパフィールド』の冒頭にあるように、英国の老女が中国から輸入した紅茶を飲む日常が成り立つのである。レイチェルの伯父ジョンは、この戦いで寺院の僧侶を殺して月長石を略奪する。大英帝国の略奪によって得た植民地の富である紅茶やダイヤモンドから、ディケンズとコリンズのそれぞれの物語が始まっていく。更にその植民地で得たものを姪に与える役割を担うおじが登場することから、おじと植民

地は、深い関わりを持っていると見ることができる。

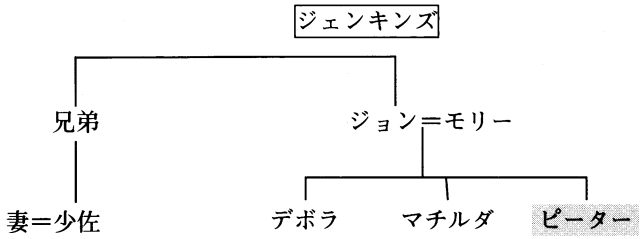
どちらの作品も、植民地で伯父が築いた財産が関わってくる。インドで侵略と略奪の末に手に入れた月長石は、英国に持ち込まれることで災いを呼ぶことになった。この作品で興味深いのは、英国がインドから得るもうひとつの財産が全編を通して登場する点である。それは阿片である。1857年に雑誌『ハウスホールド・ワーズ』で、二号に渡って記事が組まれるほど、当時、阿片は注目されていた。ジョン伯父は阿片の常習者であり、それが原因で亡くなる。フランクリンを催眠状態にさせて、無意識に月長石を盗ませる行為に走らせたのも、キャンディ医師がこっそり飲ませた阿片であり、病気になったレイチェルの母が痛み止めとして服用としていたのも阿片チンキであり、医師エズラ・ジェニングスも阿片の末期患者である。何よりも、フランクリンの無罪を証明したのも阿片による実験であった。阿片は当時、東インド会社の重要な財源だった。月長石と阿片というインドから搾取した富が、結果的に英国の上流階級の一族の負の部分を露出させると同時に、その改善にも一役買うことになるのだ。浪費癖があり、愛人を囲っていた偽善者のゴドフリーは月長石を持ち出す寸前でインド人の僧侶たちに殺され、レイチェルとフランクリンの仲は、阿片をきっかけに悪化し、阿片によって修復された。サイードによるジェイン・オースティンの『マンスフィールド・パーク』評で、内側に多く欠点を抱えるバートラム家が、植民地で築いた富と、外からやってきたファニー・プライスによって満たされる、という解釈（Said 110）は、『月長石』の展開にも通じると思われる。レイチェルと周辺の人々が、国外からやってきたジョン伯父の遺産によって、良くも悪くも大きな影響を受けたのは事実である。

4　クランフォードのおじ

『クランフォード』のピーター・ジェンキンズは、家系図を見て分かるように、長男として生まれたので、そのまま父親の後を継いで牧師に

なる将来が約束されていた。しかし、彼の軽率な行動によって父の怒りを買い、その衝突がもとで海軍に入隊してしまう。本来なら軍人は次男以下の男子が就くべき職業であるのだが、長男のピーターが半ば衝動的に就くという展開は、ジョンが軍人になる過程と比較すると、ずれが生じる。この点から、ピーターの植民地行きが特異な経緯にあると推察することができる。

『クランフォード』



この小説は、作中にインド帰りの従弟である少佐夫妻や、インド製のショール、インドに駐在していた奇術師の妻の物語など、インド関連の小道具が散りばめられていることから、すでに植民地のテーマが深く関わっていると分かる。破産したミス・マティーが東インド会社の委託で紅茶の商売を始めるという展開も、『デイヴィッド・コパフィールド』の冒頭を思い出させるものである。

ダニエルやジョンと比較すると、ピーターは彼らに共通するおじの要素が確かに含まれている。ダニエルは姪のために植民地へ移住したが、ピーターは肉親の窮乏を救うためにインドでの地所などを売り、大金持ちになって帰国する。国外へ行く行為と国内に戻る行為は対照的だが、どちらも身内の保護という理由は共通している。ピーターはジョンがインドの戦闘に参加したようにラングーンの包囲戦に関わったが、そこで捕虜になり、その後の業績で自由の身となる。帰国したジョンとは異な

り、家族が死亡したと思いこんだ彼は、インドで定住するために藍の栽培を始める。殺戮と略奪を行ったジョンと比べると、彼は穏健な手段で自由の身となり、その地でアガ・ジェンキンズと呼ばれ敬われる立場にある。子供を抱えて旅する奇術師の妻を助けてやるなど、善行ぶりも見られる。しかし、ジョンが参加した戦闘によって、東インド会社が確立し、紅茶が普及したという過程と同じく、インドで藍の栽培を始めたことは、やはり植民地政策の負の部分と無縁ではない。当時インドの藍の栽培には多くの奴隷が用いられた。奴隷による反乱も起こり、1859～60年の「青い反乱 (Blue Mutiny)」を題材にして劇も作られた。ディナボンドゥ・ミトラ (Dinabandhu Mitra) による劇『ニルダーパン (*Nildarpan*)』(1860) は、英国人の支配下に置かれ、その残虐ぶりに苦しめられる奴隷たちの姿を描いた痛烈な批判劇といわれている (Gainor 30)。いかにピーターが住民からアガと呼ばれ敬われていても、その陰に奴隷という植民地の負の部分が潜んでいる可能性は否定できない。

注目すべきなのは、ピーターの血縁上の甥や姪がいないという点である。ダニエルやジョンと比べれば、彼はおじとは呼べないかもしれない。姉妹二人は独身を通したまま老いてゆく。作中でも、彼をおじと呼ぶ者はいない。デボラはともかく、ミス・マティーは、大の子供好きで、若い頃は小地主のホルブルック氏との結婚も考えていた。しかし身分の関係から家族に反対され、実現することはなかった。

だが、ミス・マティーの結婚を阻んだ要因はピーターの側にもある。彼の悪戯による父親の折檻は、彼に牧師の将来を捨てて軍人になる道を選ばせた。そしてそのことが母親の心労のきっかけとなり、死期を早めてしまう。母亡き後に意気消沈した父を支えるために、デボラは独身宣言をしたため、ミス・マティーはさらに結婚できない状況に追い込まれてしまった。つまりピーターが間接的に彼女の結婚を妨げて、甥や姪の誕生を阻んでしまったと解釈できるのである。

ミス・マティーがメアリーに夢の中に現れる娘について語る箇所があ

る。

> Nay, my dear ... do you know, I dream sometimes that I have a little child—always the same—a little girl of about two years old; she never grows older, though I have dreamt about her for many years. (Gaskell 107)

ミス・マティーが結婚していれば生まれてくるかもしれなかった姪の誕生を阻んだのは、おじになるかもしれなかったピーターの軽率な行為によるものだった。そうとは知らないピーターは、ミス・マティーがホルブルック氏と結婚しなかったことを不思議がり、“You must have played your cards badly (Gaskell 155)”と、茶化すような発言をしてしまう。ミス・マティーとメアリーはひたすら沈黙するしかなかった。ダニエルやジョンのようにおじと姪の関係が成立しなかった背景に、ピーター自身が一因となっており、更に彼がそのことに気づいていない点が、より皮肉さを強調している。

保護者にも遺産提供者にもなれないピーターは、おじの役割を全うすることはない。彼の裕福で気前が良く、社交的な面が、クランフォードの人々の間で発揮されるのみにとどまる。実際、不仲だったジェイミソンの奥方とホギンズ夫妻は彼の仲立ちによって和解し、ミス・マティーが望むような和気あいあいとした人間関係に落ち着く結末を迎える。しかしダニエルやジョンのように、姪を代表する次の世代に影響を与えることができないピーターが、ダンおじさんのような理想のおじのイメージを体現している点を見ると、理想的なおじなどいないと言い切るハリデイのエッセイの内容に、ギャスケルが異なる角度から共鳴していると考えられる。ダンおじさんは少年向けの物語にしか登場しない、理想のおじである。そしてそのイメージに沿ったピーターもまた、現実のおじからは程遠いと思われる。

5　結び

植民地で財産を築いたおじは、英国内で暮らしている甥や姪から見れば、いざというときに助けてもらえる親族と映る。孤児になればまず頼るのが親戚のおじであり、彼が独身でしかも財産持ちであれば、遺産は自分のものになるという打算もある。そのおじが誠実で寛大な人物であれば言うことはない。

ダンおじさんは汗水流して働くことを尊ぶ精神の持ち主であり、甥たちに勤労について説教する箇所が小説に見られる。

> "Money has to be made, whether it's much or little. Fortunes are not everything, and though I've made mine I'd never advise anybody to start with that as his object in life ... But the cleanest fortunes, boys, are those made by rough hands in wild places." (Mayo 643)

少年向けの内容だけあって聞こえはよいが、作中にダンおじさんがどのような仕事を経て現在の財産を築いたかは詳しくは記されていない。取り上げられるのは、彼の異国での冒険談と、その誠実な態度である。ダニエルがオーストラリアで農業に従事し、財産を築いた過程と似ている部分はあるが、ダンおじさんの南米での生活の背景にも、ピーターと同様に奴隷の存在があった可能性は十分にある。ジョンのような略奪行為に及ばなくても、彼の財産が英国にいる親族の関心の的になっている時点で、甥たちに影響力を及ぼしていることは否定できない。

しかし実際には、ダニエルのように最初は十分な財産を持てず、姪の保護者役に徹するしかないおじや、ジョンのように姪とその周囲に災いをもたらす財産を遺すようなおじもいる。その中で、最もダンおじさんに近いピーターが、血縁上のおじにはなれないという皮肉も、当時の小説に描かれたおじの人物像の理想と現実を示していると考えられる。

Works Cited

"Blue Mutiny." *Encyclopaedia Britannica Online.* 2010. Encyclopaedia Britannica. 8 Sep. 2010 <http://www.britannica.com/EBchecked/topic/70315/Blue-Mutiny/>.

Gainor, J. Ellen, ed. *Imperialism and Theatre.* London: Routledge, 1995.

Collins, Wilkie. *The Moonstone* (1868). Ed. Sandra Kemp. London: Penguin, 1998.

Dickens, Charles. *David Copperfield* (1849-50). Ed. Jeremy Tambling. London: Penguin, 2004.

Dodd, George. "Opium." *Household Words.* 16(1857): 104-108.

——. "Opium." *Household Words.* 16(1857): 181-185.

Gaskell, Elizabeth. *Cranford* (1853). Oxford: Oxford UP, 1998.

Halliday, Andrew. "Our Uncles." *All the Year Round* 14 (1865): 108-110.

Jordan, John O., ed. *The Cambridge Companion to Charles Dickens.* Cambridge: Cambridge UP, 2009.

Mayo, I. Fyrie. "Where Uncle Dan made his fortune." *The Boy's Own Paper.* 2(1880): 609-643.

Said, Edward W. *Culture and Imperialism* (1993). London: Vintage, 1994.

Taylor, Jenny Bourne., ed. *The Cambridge Companion to Wilkie Collins.* Cambridge: Cambridge UP, 2006.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (1993). London: Faber and Faber, 1999.

後藤春美　『アヘンとイギリス帝国—国際規制の高まり 1906 ～ 43 年—』　山川出版社　2005